

Kiko

コペンハーゲン

気候ネットワーク

〒604-8124 京都府京都市中京区高倉通四条上ル高倉ビル305 Tel: 075-254-1011 / Fax: 075-254-1012

〒102-0083 東京都千代田区麹町2-7-3 半蔵門カドビル2F Tel: 03-3263-9210 / Fax: 03-3263-9463

E-mail: kyoto@kiconet.org (京都) tokyo@kiconet.org (東京) URL: <http://www.kiconet.org/>

気候ネットワークは、地球温暖化対策に取り組む市民のためのネットワークです。

「Kiko」は、温暖化問題の国際交渉の状況を伝えるための会期内、会場からの通信です。

1週目を振り返って

会議1週目半ばから、小グループに分かれた議題ごとの交渉が、非公開で開催され始めた。

インフォーマルな会合は、議定書 AWG(AWGKP) 条約 AWG(AWGLCA) COP(気候変動枠組条約締約国会議) CMP(京都議定書締約国会議) SBI/SBSTA(補助機関会合)の全てにおいて、断続的に開催されている。

特に注目の集まる議定書 AWG と条約 AWG の進捗が気になるところだが、大きな進展があったという話は聞こえてこない。条約 AWG は、160 ページを超える交渉文書について議題ごとに草案づくりの作業を行っているが、一部には、交渉に入ること自体が難航しているところもあると聞く。

2つの AWG は2週目の火曜日には作業を終え、それぞれが属する締約国会議(COP/CMP)に合意文書を報告する予定になっている。大臣たちに交渉のバトンを渡すために、可能な限り文書を整理し、合意できる箇所を詰めた上で報告することが求められている。そこへ向け、各国代表団は最後の作業に力を注がなければならない。

議長のドラフトテキスト提示

11日の木曜日には、議定書 AWG と条約 AWG の議長から、それぞれの成果を報告する合意文書が提示された。まだ個々の議題の交渉が進められている最中なのに、なぜこのタイミングで、火曜日

に仕上げるべき合意文書を議長が示したのか、その真意は定かではない。プロセスの透明性について意見を言う国も少なからずあった。しかし、確実に火曜日に作業を終えるためには、各議題のドラフティング作業と同時並行して、全体の文書を作成する必要があったのだろう。

議定書 AWG ドラフトテキストは、これまで3つのコンタクトグループでそれぞれ検討されてきた文書を1つのコンタクトグループで検討するため、1つにまとめられた。LULUCF(吸収源)の部分以外は、これまでの内容とあまり変わらない。LULUCFに関しては、第2約束期間で使用できる「森林管理」の吸収量について、第1約束期間と同じ上限値とする案と、各国事情を反映したベースラインである「参照レベル」の数値(Mt-C/yr)が別表の形で示される案との2つが示され、削減目標との関連で関心が集まっている。

条約 AWG ドラフトテキストは、主要な論点を列記したわずか7ページの合意案となっており、交渉の結果や合意の法的な性格について予断のない文書と位置づけられている。議長によって今回初めて提示されたこの草案は、バリ行動計画の5つの要素(長期ビジョン、適応、緩和、資金、技術移転)について、各国の意見を基に作られた合意案だ。緩和については、先進国が90年比25~40%削減する案から45%削減をする案まであり、京都議定書の批准国は第2約束期間の目標を

設定するものとして採択し、アメリカに関しては条約の別表に目標を記すようになっていた。また、途上国の行動は、支援に基づく行動を登録/記載し、資金をマッチングするとされている。資金に関しては、2010~2012年の短期の追加資金について各国の宣誓を別表に書き込む形にしているものの、長期の資金については具体的な言及がされていない。

この条約 AWG のドラフトテキストについて、日本・アメリカ・オーストラリア・カナダなどの先進国は、緩和の項目に問題がある、京都議定書第2約束期間は受け入れられないと強い反対意見を重ねた(日本はさらに交渉を止めたことで、化石賞を今回の会合で初受賞。その理由については裏面の記事参照)。

実際、テキストは各国の主張を痛み分けでとりいれた形になっており、どの国にとっても満足できるものでないだろう。NGOの立場からも、これでいいというものではない。しかし、交渉を進める土台としては悪いとはいえない。ここから交渉を進めるなかで、内容を野心的なものに引き上げていくことは可能だからだ。

残された時間は少ない。今日1日で交渉を加速させ、明日、火曜日に向けて文書作りを仕上げることが求められている。

先週末から各国の大臣たちが到着し始めた。すでに閣僚級の会合も非公式で始まっている。まさに今、「コペンハーゲン合意」へ向けた、かつてない重要な1週間が始まろうとしている。

～日本、化石賞で1位獲得。

NGOが大臣へ申し入れ～

新政権誕生後、初めてCOPに参加した小沢環境大臣を出迎えたのは、化石賞だった。京都議定書の12回目の誕生日にあたる12月11日の条約AWG会議で、日本政府が交渉をブロックするような事態を招いたからだ。1つの合意を強く主張する立場をとる日本政府は、新しく示された条約AWG議長案が京都議定書の第2約束期間が継続することを想定したもの(つまり2つの合意を前提としている)と読めるとして、2つの合意では議定書改正は受け入れられないと強く反対した。同じ主張をする国もある。しかし、京都議定書の生みの親でありそれを大切にしてくれるはずの日本が率先して拒否していることに、世界の環境NGOが失望を表したのだ。また発言内容だけでなく、口調の強硬さも参加者たちを驚かせた。

京都議定書を尊重しないのは、前政権のときとまったく同じだ。(新政権と旧政権の違いは何なのだろう...?)

政府は、この1週間の交渉で柔軟な交渉姿勢を示す必要がある。環境NGOは連名で環境大臣に手紙を出し、現在の交渉態度を改め、京都議定書を踏まえたコペンハーゲン合意を目指して交渉に臨むよう申し入れた。

ツバルの交渉官、涙で訴え

13日に開かれたCOPの総会では、最初の総会から延期されてきた条約と議定書の改正についての議題について、コニー・ヘデガーCOP議長から、意見がまとまらないままだという報告があった。これは、ツバルなどの国々が法的拘束力のある結果を条約・議定書の両方で採択するための「議論の場(コンタクトグループ)」の設置を求めていることを指している。ツバルは「この件は、途上国からの動きとしてマスコミにも大きく取り上げられた。しかし、一部には、デンマーク政府をこの場で侮辱しようとしているのではないか」というような記事もある。これまでインタビューの要請に応じないでしたが、この場で訴えたいのは、私たちは生存をかけてこの交渉に臨んでいるということだ」と発言。また、「オバマ大統領

はノーベル平和賞をもらったが、本当に平和を考えるならこの場でリーダーシップをとるべきだ。アメリカの議員たちに私たちの将来を握らせるべきではない」と、最後は涙を流しながら訴えた。普段は冷静で、京都議定書の採択も経験しているベテランの交渉官の真摯な訴えに、会場から拍手が沸き起こった。これに対して議長は、「気持ちにはよくわかる。拘束力ある結果は私たち全員の目的だ」とツバルを後押しする発言をした。

人、人、人で大混雑

1週目後半から、会議場は世界中からやってきた参加者であふれている。その混雑ぶりは、通勤時間帯の新宿駅を思い浮かべてもらえばいいかもしれない。通路は人であふれ、どこでも長い行列ができています。入場時のセキュリティーチェック、コートを預けるクローク、NGOが仕事をするコンピューターセンターやコピーコーナー、さらにはレストランやカフェ、トイレまで。ただでさえ広い会場内の移動に時間がかかるというのに、通路の人ごみをかきわけ、何をすることも行列、行列である。そのためコピー1枚にも膨大な時間がかかるようになった。

それもそのはず。会場のペラセンターの収容人数は15,000人だが、登録者はその2倍を超える34,000人もいる。参加者が増すにつれ、セキュリティーが厳しくなってきた。2週目からは各国閣僚や首脳が到着するうえ、さらに参加者が増加するため、NGOの入場が制限される。

そのため、12日の土曜日には、各団体にセカンダリーカード(第2カード)が配布された。バッチの配布枚数は団体ごとに3分の1から4分の1。つまり、団体ごとに参加者の3分の2、あるいは4分の3が入場できないことになる。2週目から参加を予定している人で会議場に入れない人も出てきそう。会場の混雑がどうなるのか。予想がつかないのは、会議の成果だけでない。

京都議定書は12歳

12月11日、条約AWGと議定書AWGの合同会合で、とある国の政府代表団の人が、「条約AWGの議長の

マイケル・ザミット・クタヤール氏(COP3の時の条約事務局長)が『京都議定書おめでとう』とお祝いしていたよ」と声をかけてくれた。そう、まさに12年前のこの日、京都議定書が生まれたのだ。12歳の誕生日おめでとう!

宇宙人と若者たち 日本政府代表に要請

「ユースと将来世代の日」の12月11日、ユースの参加者は「2050年に、あなたは何歳ですか?」と染め抜かれたTシャツを身につけ、アクションやサイドイベントなどさまざまな活動を展開しました。

気候ネットワークのボランティアを含む日本ユース代表団のメンバーは、海外の環境NGOとともに、温暖化の被害を受けた星から逃れてきたエイリアンに扮して、日本政府代表団の控え室を訪れました。

若者たちは、「日本は気候リーダーになってくれますか?」「地球を守るための気候基金創設を!!」などと、現在難航している交渉の打開に向けて、日本政府に積極的なリーダーシップを求めました。

また、日本ユースの若者が外務省の山田参事官に声明文を手渡し、「2050年の私たちの未来のために、今リーダーシップを発揮してほしい」「そのためにも、今、途上国に向けた大規模な資金支援の表明を」と訴えると、山田参事官からは「積極的なリーダーシップを発揮したい」という前向き返答をいただくことができました。



Kiko COP15/COPMOP5 通信 No.3

2009年12月14日発行

浅岡美恵、大久保ゆり、川阪京子、
佐藤由美、廣岡睦

川阪 京子 現地携帯: +45-52-64-50-25